



Title	ファシスト政権期のイタリアにおけるエチオピア人種論
Author(s)	石川, 博樹
Citation	スワヒリ&アフリカ研究. 2025, 36, p. 84-98
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100837
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ファシスト政権期のイタリアにおけるエチオピア人種論

A Study of the Racial Theories on the Ethiopians in Italy during the Fascist Period

石川 博樹*

ISHIKAWA Hiroki

0. はじめに

「人間の諸集団は肌の色や髪の色や縮れ具合といった身体的形質によって区別し得る」という観念に基づいた「人種」概念については、その生物学的実在性が否定され、社会的構築物にすぎないものとする学術的見解が定説化して久しい。しかし 1880 年代から 20 世紀前半にかけて、ヨーロッパ諸国やアメリカ合衆国において盛んに人種研究が行われ、世界の各地の人間集団の人種分類に関する書籍が多数出版されたこと、人種研究が 20 世紀に数々の厄災を世界にもたらしたことは事実である（竹沢 2005）。

サハラ以南アフリカにおいては、ヨーロッパにおける人種研究のなかで生み出された「ハム仮説（Hamitic Hypothesis）」と呼ばれる人種仮説が 1994 年に多数の犠牲者を出したルワンダ大虐殺の遠因となったことが知られている。この仮説では、アフリカ大陸の中央部から南部にかけて広がる「黒人」の居住地に「文明の痕跡」が存在したとしても、それらは北方から到来した「黒人種より優秀な人種」の「ハム人（Hamites）」がもたらしたものと解釈された。ルワンダの場合、19 世紀末から 1960 年代初頭まで続いたドイツおよびベルギーの植民地支配期において、「ハム人であるツチ（Tutsi）」が「黒人であるフツ（Hutu）」を征服し、ルワンダ王国を建国したとする説が定説化した（栗本 2005: 363–373; 武内 2009: 83–87）。

このような植民地支配期に形成されたルワンダ史解釈では、「ハム人であるツチ」は「エチオピアのガッラ（Galla）」であったとされた。「ガッラ」とは、現在エチオピア連邦民主共和国で最多の人口を擁する民族オロモ（Oromo）のことである¹。ハム仮説におけるエチオピアのイメージは、19 世紀から 20 世紀前半にかけて行われたサハラ以南アフリカを対象とする人種研究における「エチオピアには黒人種とは異なる人種に属する

* 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所准教授

¹ 「ガッラ」という語は蔑称とされ、現在では使用されなくなっている。

人々が居住している」というエチオピアの特異な位置付けが基盤となって生み出されたものである。

そのようなエチオピアに対し、イタリアは 1935 年 10 月に侵攻を開始し、ファシスト政権の「統領 (Duce)」たるムッソリーニ (B. Mussolini) は 1936 年 5 月にその領有を宣言した。その後エチオピアと周辺のイタリアの植民地が統合され、「イタリア領東アフリカ (Africa Orientale Italiana)」が形成された (図 1)。

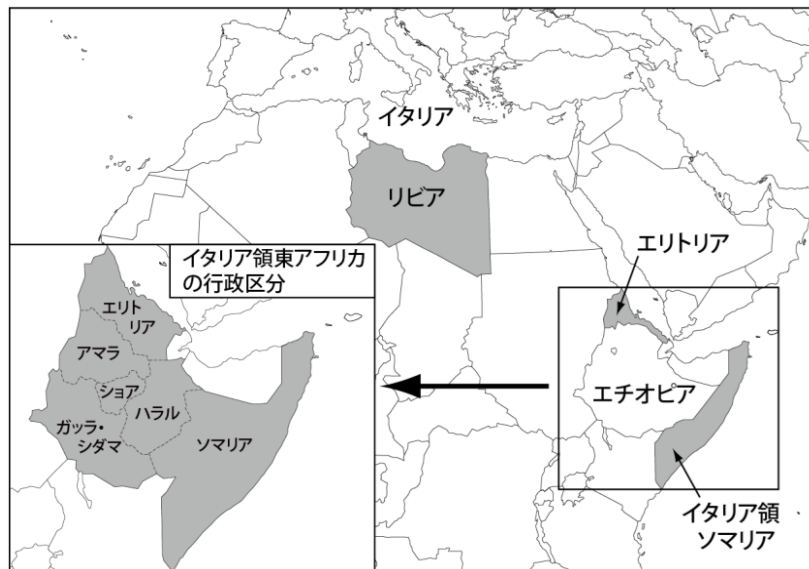


図 1. アフリカ大陸におけるイタリアの植民地とイタリア領東アフリカの行政区分 (筆者作成)

イタリアによるエチオピア征服とイタリア領東アフリカの支配を考察するうえで必要となる作業の 1 つが、エチオピアの諸民族に対するイタリア人の人種認識の解明である。イタリアは第 2 次世界大戦の勃発後、1943 年までにアフリカにおける全ての植民地を喪失した。第 2 次世界大戦後、エチオピアをはじめとするアフリカの旧植民地に対するイタリア国内の関心は低調な状態が続いた。1990 年代以降そのような状況に変化が生じ、植民地関連の研究が増加するとともに、取り上げられるテーマも多様化した²。その中でファシスト政権期のイタリアにおけるエチオピア人種論に関する研究が 2000 年前後から公表されるようになった。

² イタリアにおける植民地をめぐる議論の変化については、小田原の解説 (小田原 2011) を参照。

本稿では、まず 1890 年代からファシスト政権期までのイタリアにおけるエチオピアの諸民族を対象とする人種研究の変遷について、先行研究において明らかにされている点を整理する。次いで先行研究では取り上げられることが少ないものの、ファシスト政権期から第 2 次世界大戦後にかけて人種研究を継続していたイタリア人人類学者ビアスッティ (R. Biasutti) のエチオピア人種論に着目し、ファシスト政権期のイタリアにおけるエチオピア人種論について考察する。

1. 先行研究に見るファシスト政権期までのエチオピア人種論

1.1. ファシスト政権成立以前

イタリア統一運動の結果、1861 年にイタリア王国 (Regno d'Italia) が成立した。その後ヨーロッパ列強が対外進出の動きを強めると、イタリアもアフリカにおける植民地獲得に乗り出すようになった。そして 1889 年に現在のエリトリア国の領域を獲得し、1890 年に「エリトリア植民地 (Colonia Eritrea)」として、1908 年には現在のソマリア連邦共和国の一部を「イタリア領ソマリア (Somalia Italiana)」として領有することになった (Filaldi 2017: 165–214)。この間、エリトリアを足掛かりとしてエチオピアの征服を試みたものの、1896 年のアドワの戦い (Battle of Adwa) における敗北の結果、イタリアによるエチオピアの植民地化が失敗に終わったことはよく知られている。

著書『ファシスト政権期のイタリアにおける人種論』(Gillette 2002a)において、アメリカ合衆国の歴史学者ジレット (A. Gillette) はファシスト政権成立以前のイタリアにおける主要な人種研究者として、イタリア人人類学者セルジ (G. Sergi) を取り上げている。イタリアの歴史学者ソルゴニ (B. Sòrgoni) は、2003 年に発表した論考「植民地期初期のイタリア人類学とアフリカ人」(Sòrgoni 2003)において、エリトリア植民地が成立した 1890 年から、ファシスト政権が成立した 1922 年までの期間にイタリアで行われたエチオピアの諸民族の人種関連研究を検討している。この論考においてソルゴニは、セルジに加えて、モチ (A. Mochi)、ジュフリーダ・ルッジェーリ (V. Giuffrida-Ruggeri)、コンティ・ロッシーニ (C. Conti Rossini) を取り上げている。以下、ジレットとソルゴニの解説に基づいて、これら 4 名の研究者のエチオピア人種論の要点を確認する。

まずセルジはヨーロッパの人種研究における著名な研究者の 1 人であった。1841 年にシチリア島のメッシーナ (Messina) で生まれたセルジは、大学在学中にガリバルディ

(G. Garibaldi) のシチリア島遠征に参加している³。彼の関心は当初心理学にあったが、その後人類学研究も行うようになった。セルジはローマ大学等で教鞭を執るかたわら、1936年に95歳で他界するまで300冊を超える書籍を出版した。セルジの著書としてよく知られているのは、1901年に英語で出版された『地中海人種：ヨーロッパの諸民族の起源に関する研究』(Sergi 1901)である。本書やその基になったイタリア語版(Sergi 1895)などにおいて、セルジはヨーロッパ人の祖先は「アフリカの角(Horn of Africa)」地域に居住しており、この集団が3つに分かれ、アフリカにとどまった集団が「アフリカ人(African)」に、地中海周辺地域に広まった集団が「地中海人(Mediterranean)」に、さらに北方に移住した集団が「北方人(Nordic)」になったと主張した。またセルジは、古代ギリシア文明および古代ローマ文明を築いたのは「地中海人」であってアジアから到来した「アーリア人(Aryan)」ではなく、また「北方人」を「アーリア人」と考えることは誤りであるとも述べている(Gillette 2002a: 24-27; Sòrgoni 2003: 67-68)。

次にモチは1874年にフィレンツェ(Firenze)の郊外で生まれ、フィレンツェ高等研究所(Istituto di Studi Superiori di Firenze)で人類および類人猿の頭蓋骨研究を行い、学位を取得した⁴。その後1931年に他界するまで、彼は人類学や先史考古学の研究を続け、1924年にはイタリア人類学・民族学協会(Società Italiana di Antropologia e Etnologia)の会長に就任している。1900年にモチは「フィレンツェ国立人類学博物館が所蔵するエチオピアの諸民族の民族誌資料」という論考(Mochi 1900)を発表している。この論考で彼はエチオピアの先住民族が「ハム人」であったと述べ、彼らがアフリカ大陸中央部から到来した「黒人」、またアジアから到来した「セム人」と混血して、現在のエチオピアの諸民族が生まれたと主張している(Sòrgoni 2003: 65-66)。

ジュフリーダ・ルッジェーリは、1872年にシチリア島のカターニア(Catania)で生まれ、1896年にローマ大学で医学の学士号を取得した⁵。彼はナポリ大学などで教鞭を執りつつ、人類学研究を続け、1921年に他界した。1915年に公表した論考「東アフリカの人類学に関する新たな研究」(Giuffrida-Ruggeri 1915)において、ジュフリーダ・ルッ

³ セルジの経歴については、『イタリア人名事典』のモンタナーリ(E. Montanari)の解説(Montanari 2018)を参照。

⁴ モチの経歴については、『イタリア人名事典』のリーゴ(G. S. Rigo)の解説(Rigo 2011)を参照。

⁵ ジュフリーダ・ルッジェーリの経歴については、『イタリア人名事典』のゼローリ(S. L. Zeroli)の解説(Zeroli 2001)を参照

ジェーリはエチオピアにアフリカ大陸の中央部とアジアの双方から人々の到来が行われたことを認めつつ、エチオピアの先住民族については「黒人」であったと主張し、また「本物の黒人」と比べてエチオピアの人々が「肌色が明るく、文明レベルが高い」のは、アラビアから到来したセム人との混血の影響によるものであると考えた。ジュフリーダ・ルッジェーリのこの説は、古代エジプト人と「アフリカの角」地域の「ハム人」の双方を「白人」とする説や上述のセルジの「地中海人」とエチオピアの諸民族が同じ起源を持つとする説に反対するものであった（Sòrgoni 2003: 66）。

コンティ・ロッシーニは1872年にイタリア南部のサレルノ（Salerno）で生まれ、ローマ大学で法学を学んだ⁶。大学卒業後、エリトリアとトリポリタニア（Tripolitania）⁷において植民地官僚として勤務した彼は、イタリア財務省の局長を務めるなど、財務官僚としても手腕を発揮した。その一方で、コンティ・ロッシーニは1920年から1949年にかけてローマ大学でエチオピアの諸言語や歴史の研究を行い、多数の著書・論文および校訂・訳注書を執筆した。彼は第2次世界大戦後もアフリカ研究者としての名声を保ち、1947年から1949年にかけてイタリア人類学研究所（Istituto Italiano di Antropologia）の副所長を務めたものの、1949年に他界した。コンティ・ロッシーニは1913年に発表した「エリトリアの人々の民族と歴史に関する素描」（Conti Rossini 1913）という論考で、エリトリアの諸民族の歴史について考察している。上述の3名の人類学者が頭蓋骨の形態などの身体的特徴を基にして人種分類を行っていたのに対し、コンティ・ロッシーニは植民地官僚として赴任していたエリトリアで実施した現地調査において得られた文献や口頭伝承を基にして、同地の諸民族の来歴を研究した。そのような研究手法により、コンティ・ロッシーニはエチオピアの諸民族が他地域から到来した可能性を否定している（Sòrgoni 2003: 68–69）。

このようにファシスト政権成立以前のイタリアにおいては、身体的特質に基づく人種研究が進められる一方で、アフリカで獲得した植民地における現地調査も進められていた。そしてこれらの研究において提唱されたエチオピアの諸民族の人種に関する説は多様であった。

⁶ コンティ・ロッシーニの経歴については、『イタリア人名事典』のリッチ（L. Ricci）の解説（Ricci 1983）を参照。

⁷ 現在のリビア国の北西部にあたる地域で、伊土戦争の結果、イタリアがオスマン帝国から奪取した（Vandewalle 2006: 24–30）。

1.2. ファシスト政権期のエチオピア人種論

1922年ムッソリーニ率いるファシスト党 (Partito Nazionale Fascista) が政権を獲得した。ファシスト政権期のイタリアにおける人種をめぐる問題については、前述のジレットの著書のほかに、ソルゴニが「ファシズム下のイタリア帝国における人種差別的言説と実践」という論考 (Sòrgoni 2002) を発表している。またイタリア人歴史学者カッサータ (F. Cassata) は著書『ファシスト政権期のイタリアにおける人種主義と反セム主義』 (Cassata 2024) を出版している。これらの先行研究では、生物学的な意味での人種概念に懐疑的で、ユダヤ人に対して特別な反感を抱いていたわけではなかったムッソリーニが、1930年代中頃までナチス・ドイツの主張するアーリア人種至上主義や反ユダヤ主義に対して距離を置いていたこと、その後エチオピアへの侵攻を契機にイタリアが国際的に孤立してナチス・ドイツに接近するなか、ムッソリーニがドイツの人種政策に同調する動きを強めたことが指摘されている。

1938年7月14日、ファシスト政権を支持するイタリアの日刊紙『イタリア新聞 (*Il Giornale d'Italia*)』に、後日「人種宣言 (Manifesto della razza)」として知られるようになる論考が掲載された。イタリア人をアーリア人の末裔であると位置づけ、反ユダヤ主義を掲げるこの宣言の署名者に名前を連ねたイタリア人人類学者がチプリアーニ (L. Cipriani) である (Gillette 2002a: 70)。彼はファシスト政権期の人種主義を扱った上述の先行研究において、当時のアフリカに対する人種差別的な人種研究を象徴する人物として取り上げられている。

チプリアーニは1892年にイタリアのフィレンツェで生まれ、イタリア国立人類学・民族学博物館 (Museo Nazionale di Antropologia e Etnologia) が所蔵するエチオピアで収集された人骨の研究を行った⁸。彼は1923年にその成果をまとめて「アビシニアの領域における頭蓋骨」と題して公表した (Cipriani 1923)。その後イタリア国立人類学・民族学博物館の助手に就任したチプリアーニは、1927年から1931年にかけて3回のアフリカ調査を実施した。最初の調査で彼が訪問したのは、現在の南アフリカ共和国に位置する「ズールーランド (Zululand)」と「トランスヴァール (Transvaal)」、そして現在のボツワナ共和国にあたる「ベチュアナランド (Bechuanaland)」であった。2回目の調査では、アラビア半島から東アフリカ沿岸にかけての諸都市を訪問した後、現在のザン

⁸ チプリアーニの経歴については、『イタリア人名事典』のスルディッチ (F. Surdich) の解説 (Surdich 1981) を参照。

ビア共和国にあたる「北ローデシア (Northern Rhodesia)」、およびジンバブウェ共和国にあたる「南ローデシア (Southern Rhodesia)」を訪れた。さらに3回目の調査では、現在のコンゴ民主共和国にあたる「ベルギー領コンゴ (Colonie du Congo belge)」を訪問した。その後1932年から1935年にかけて、チプリアーニは現在のリビア国南部にあたるフェザーン (Fezzan) 地方⁹においてトゥアレグ族などの調査を2回実施し、またインド南部とスリランカを訪問した。そして1937年から1938年にかけてチプリアーニは、イタリア王立アカデミー (Reale Accademia d'Italia) がイタリア領東アフリカに派遣した調査団に参加し、エチオピアにおける調査を2度にわたり実施した。

これらの調査を行いつつ、チプリアーニは多数の著書・論考を発表した。1927年から1931年にかけて実施した3回のアフリカにおける調査の後、彼は1932年に『アフリカの諸民族の過去と未来に関する考察』という著書 (Cipriani 1932) を出版している。その中で彼はグレートジンバブウェ (Great Zimbabwe) 遺跡に代表される「ジンバブウェの文明 (civiltà di Zimbàbue)」について「ハム人種 (razza camitica)」が残したものであると主張するとともに、かつてアフリカ大陸の広い範囲に居住していた彼らの形質が、「アフリカの東の角 (corno orientale dell'Africa)」において最もよく保存されていると述べている (Cipriani 1932: 102)。

上述のとおり、チプリアーニがエチオピアで初めて調査を実施したのは1937年のことであった。しかしその前に彼はエチオピアの諸民族の人種に関する自説を提唱している。まず1935年に発表した論考「人類学に基づくエチオピア人の過去と未来」(Cipriani 1935) では、「エチオピア人を他のアフリカの人々とは完全に異なると考え、別のグループと考えるのは誤りである」と主張している (Cipriani 1935: 917)。翌1936年にチプリアーニは著書『民族的不条理：エチオピア帝国』(Cipriani 1936) を出版する。本書においてチプリアーニは、「身長が高く、手足がほっそりとしており、身体の比率がコーカサス人とほぼ同じ」であり、「(肌色は) 完全に白色ではないにしても黒くはなく、細面で、顎が突き出しておらず、鼻は狭く高い」といった身体的特徴を持つ「現在のエチオピア人と人種的に関係のある人々」がかつてアフリカに広く居住し、高度な文明を築いていたと述べ、彼らがアフリカの他の集団と混淆することによって「衰退」したと主張した (Cipriani 1936: 223-224, 305)。ファシスト政権の人種イデオロギーを普及させる

⁹ 現在のリビア国の南西部にあたる地域で、伊土戦争の結果、トリポリタニアと同様にイタリアがオスマン帝国から奪取し、植民地化を進めた (Vandewalle 2006: 24-30)。

ために刊行されていた雑誌『人種の防衛』に1938年に寄稿した論考「人種主義から見たエチオピア人」(Cipriani 1938)においても、チプリアーニは同様の主張をしている。

1930年代のヨーロッパにおけるアフリカ人種論では、「黒人とは異なる人種のハム人がアフリカの文明の担い手であった」とするハム仮説が定説化しており、エチオピアの諸民族は「ハム人、ないしセム化されたハム人」と分類されることが多かった¹⁰。チプリアーニの主張は、ハム仮説を否定することなく、エチオピアの諸民族の人種的優秀性を否定するものであった(Sòrgoni 2002: 50)。そしてこのようなチプリアーニの主張は、セルジが提唱した「エチオピア人とイタリア人は同一人種から派生した」とする人種論と、征服したエチオピアにおいてファシスト政権が進めていたイタリア人とエチオピア人の隔離政策¹¹との間に生じる矛盾を解消し、後者に理論的な正当性を与えるものでもあった(Cassata 2024: 212)。

2. ビアスツェッティのエチオピア人種論

2.1. 「人種宣言」後のチプリアーニ

ファシスト政権に協力したイタリアの人類学者としては、「人種宣言」の起草者であったランドラ(G. Landra)が有名であるが、チプリアーニも上述の『人種の防衛』の編集委員となり、また1938年8月に人民文化省(Ministero della cultura popolare)内に設置された「人種問題研究局(Ufficio studi del problema della razza)」の局員となるなど、ファシスト政権の人種政策に深く関与していった(Gillette 2002b)。しかし1940年にチプリアーニは、政府の資金を得て実施した調査で入手したアフリカの仮面を密かに売却し、その利益を自らのものにすると告発され、フィレンツェ大学附属人類学研究所(Istituto di Antropologia della Regia Università di Firenze)の所長の任を解任され、また同大学の人類学教授の職も失ってしまう(Gillette 2002a: 144)。その後1942年に彼はクレタ島に赴き、そこで人類学的調査を実施した。第2次世界大戦終了後、チプリアーニは

¹⁰ 1930年前後のヨーロッパにおけるアフリカ人種論を語る際にしばしば取り上げられるセリグマン(C. G. Seligman)の『アフリカの人種』では、「ハム人」は北群と東群の2つに分けられ、エチオピアを含めた「アフリカの角」地域の諸民族の大半は東群に分類されている。そして「アビシニア人(Abyssinian)」と総称されるエチオピアの北部に居住するセム系言語話者集団については、東群に含めつつ、「セム人や黒人と混血している」と説明されている(Seligman 1930: 97)。

¹¹ ファシスト政権はエチオピア征服後、イタリア人とエチオピア人の混雑を恐れ、両者を隔離するための布告を出した(Pankhurst 1969: 274-275; Gillette 2002a: 57)。

ファシスト政権の人種差別政策と反ユダヤ政策を支持したとして逮捕されたものの、釈放された。その後彼はインド政府から招待を受け、ベンガル湾に浮かぶアンダマン諸島 (Andaman Islands) で調査を行った。彼は 1962 年にフィレンツェで他界した (Gillette 2002a: 181)。

2.2. ビアスッティの経歴

このようにチプリアーニは第 2 次世界大戦後アフリカ研究から遠ざかった。その一方で、ファシスト政権期から第 2 次世界大戦後にかけて人種研究を継続し、第 2 次世界大戦後もイタリアの人類学研究で重きをなしたのがビアスッティである。彼は 1878 年にイタリア北東部のサン・ダニエーレ・デル・フリウーリ (San Daniele del Friuli) に生まれ、フィレンツェ大学を卒業した¹²。彼の関心は当初自然地理学にあったが、しだいに人類学に対する関心を強めていき、1905 年にはエチオピア南部の牧畜民・農耕民・狩猟民に関する論考 (Biasutti 1905) を発表している。1913 年に ビアスッティはナポリ大学に移り、さらに 1927 年にフィレンツェ大学の地理学講座の教授に就任し、1948 年に定年に達するまで研究・教育活動に従事した。

彼の主要業績が編著『地球上の人種と民族』である。本書の初版 (Biasutti 1941) は 3 巻本で、1941 年に出版された。第 2 版 (Biasutti 1953–1957) 以降は 4 巻本となり、第 2 版は 1953 年から 1957 年にかけて、第 3 版 (Biasutti 1959) は 1959 年に、第 4 版 (Biasutti 1967) は 1967 年に刊行された。本書には多数のイタリア人研究者が寄稿した。執筆者の専門分野は、人類学、人文地理学、古生物学、考古学、社会学、生理学、病理学など多岐にわたった。1965 年に他界するまで、ビアスッティはフィレンツェ大学名誉教授として、イタリアの人類学・地理学の主要な研究者として活動した。

2.3. ビアスッティのエチオピア人種論の内容

1937 年にビアスッティは「エチオピア人の人類学的位置」(Biasutti 1937) という論考を発表している。この論考においてビアスッティはまず「エチオピア」という語の語源と、古代地中海世界において「エチオピア人」と呼ばれた人々がどのような集団であったのかについて述べる。そして 18 世紀以降、頭蓋骨の計測に基づく人種分類を提唱し

¹² ビアスッティの経歴については、『イタリア人名事典』のチェルッリ (E. Cerulli) の解説 (Cerulli 1968) を参照。

たことで知られるドイツの比較解剖学者ブルーメンバッハ (J. F. Blumenbach) らにより、「エチオピア」という語が人種分類で使われるようになったことを説明する (Biasutti 1937: 41-42)。

ビアスッティは「エチオピア人種 (Etiopide)」の身体的特徴として、「白人と比較して手足が長く、細い」「肌色は明るいチョコレート色からとても濃い茶色まで多様」、「髪がやや縮れている」「唇が突き出ていない」「極めて長頭」「身長は一般的に高い」といった点を挙げている (Biasutti 1937: 47)。ビアスッティによれば、このような「エチオピア人種」の人種分類については、大きく分けて3つの説が提唱された。

1つ目は、エチオピア人種を白人種に分類するとともに、『旧約聖書』の記述に基づいて「ハム人」と呼ぶ説である (Biasutti 1937: 43-46)。このような分類と呼称は、ドイツ人生物学者ヘッケル (E. Haeckel) によって彼の著書『自然創造史』(Haeckel 1868) で提唱された後、「近代的な人類学研究の創始者の1人」であったフランス人生物学者キャトルファージュ (J. L. A. de Quatrefages) をはじめとする数多くの研究者たちによって支持された。ビアスッティは、この説に関する「最も権威のある現代の代表者」として、セルジとアフリカ大陸内陸部で人類学調査を行い、「ハム人の種類」(von Luschan 1912) を発表したオーストリア人人類学者フォン・ルシャン (F. von Luschan) を挙げている。

2つ目の説は、エチオピアの諸民族が南アジアなどの民族とともに、白人種や黒人種とは異なる別の人種に属するとみなすものであった (Biasutti 1937: 46-50)。この説には、エチオピアの諸民族、南インドのドラヴィダ人 (Dravidian)、オーストラリア先住民を1つの人種として分類する説や、エチオピアの諸民族とドラヴィダ人を1つの人種とする説があった。ジュフリーダ・ルッジェーリは後者の説を主張していた。

ビアスッティは3番目の説として、エチオピア人種を白人種と黒人種の混血種とする説を挙げる (Biasutti 1937: 50-52)。これは現在のウクライナ南部に位置するオデッサ (Odessa) 出身で、ドイツで医学を学んだシュトラッツ (C. H. Stratz) が1904年に出版した著書『人体の自然史：身体人類学の概要』(Stratz 1904) において提唱した人種理論に基づく説である。本書については邦訳 (シュトラッツ 1978) があるので、その訳語を用いれば、シュトラッツは世界の諸民族を「原形人種 (Protomorphe Rasse)」「主形人種 (Archimorphe Rasse)」「転形人種 (Metamorphe Rasse)」という3種の人種に分類した。そしてエチオピア人種については「主形人種」の白人種と黒人種が混血して出現した「転形人種」と解釈している。ビアスッティによれば、シュトラッツのこの説は、フリッチ

ユ (G. Fritsch) をはじめとするドイツの研究者だけではなく、イタリアの人類学者の間でも支持され、彼自身もこの説に賛同していた。しかしこのようなエチオピア人種論は、イタリアではまずジュフリーダ・ルッジェーリによって、その後チプリアーニによって強く批判されたという。

上述のとおり、ビアスッティは 1941 年に『地球上の人種と民族』の初版を刊行する。第 2 巻はアフリカとアジアの人種と民族に関する解説にあてられており、その中でビアスッティは第 1 章「アフリカ人の人種と文化 (Razze e culture africane)」の執筆を担当している。この章においてビアスッティは「エチオピア人種」について「シュトラッツが 1904 年に表明し、今日一般に受け入れられている見解では、それは白人種と黒人種の混血種である」と述べている (Biasutti 1941 II: 26)。またアフリカ大陸の人種分布図として以下に示す図 (図 2) を掲載している。つまりビアスッティは 1937 年の論考において支持を表明したシュトラッツの人種理論に基づくエチオピア人種論を本書において踏襲しているのである。『地球上の人種と民族』はその後版を重ね、1967 年に第 4 版が刊行された。増補改訂が行われるなか、シュトラッツの人種理論に基づくエチオピア人種の解説は、第 4 版まで基本的に変わることはなかった (Biasutti 1967 III: 92-95)。

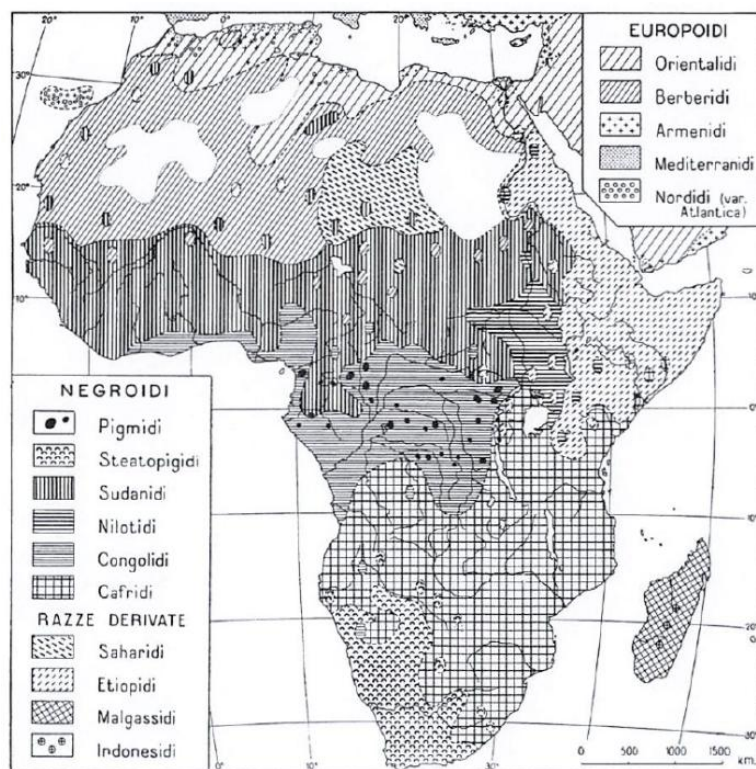


図 2. ビアスッティ編『地球上の人種と民族』初版に掲載されたアフリカ人種分布図 (Biasutti 1941 II: 28)

3. おわりに

本稿では、まず 19 世紀末からファシスト政権期までのイタリアにおけるエチオピア人種論の展開について先行研究に基づいて整理し、次いでファシスト政権期から第 2 次世界大戦後まで人種研究を継続したイタリア人人類学者ビアスッティのエチオピア人種論の検討を行った。19 世紀後半に人種分類研究がヨーロッパで興隆するなか、イタリアでも人種研究が盛んになった。その中では多様なエチオピア人種論が提起され、エチオピアの諸民族とイタリア人をはじめとするヨーロッパ人が同じ人種に属し、「アフリカの角」地域に起源を持つとする説も提唱された。しかしファシスト政権に入ると、当時ヨーロッパ諸国で定着していたハム仮説に則りつつ、エチオピアの諸民族の人種の優秀性を否定し、ファシスト政権の人種政策を正当化する人類学者チプリアーニが登場した。その一方で 19 世紀後半以来の人種研究をふまえたビアスッティらによるエチオピアの諸民族に対する人種研究がファシスト政権期にも進められていた。

シュトラッツの人種論に依拠したビアスッティのエチオピア人種論は現在顧みられることはない。しかしファシスト政権期にこのような人種論が「科学的な研究の成果」として社会的に認識されていたことは確かである。イタリア領東アフリカにおけるイタリアの人種政策や統治政策について研究を行う際には、先行研究で着目されてきたチプリアーニの人種差別的なエチオピア人種論だけではなく、ビアスッティらのエチオピア人種論についてもふまえる必要があると言えよう。

謝辞

本稿は日本学術振興会科学研究費基盤研究 (B)「第 2 次イタリア・エチオピア戦争をめぐる人種・民族問題の研究」(23K20486) の研究成果の一部である。イタリア近現代史を専門とする茨城大学教育学部の新谷崇助教には、本研究課題の実施にあたって貴重なご助力をいただき、また本稿執筆にあたって重要なご助言をいただいた。ここに記して謝意を表したい。

参考文献

- 小田原琳. 2011. 「歴史の否認——植民地主義史研究に見るイタリア歴史修正主義の現在」『クアドランテ』12/13, 185–195.
- 栗本英世. 2005. 「人種的アフリカ観の残影——「セム」「ハム」と「ニグロ」」竹沢泰子（編）『人種概念の普遍性を問う——西洋的パラダイムを越えて』pp. 356–389. 人文書院.
- C・H・シュトラッツ、高山洋吉（訳）. 1978. 『シュトラッツ選集 人体の自然史』西田書店.
- 武内進一. 2009. 『現代アフリカの紛争と国家——ポストコロニアル家産制国家とルワンダ・ジェノサイド』明石書店.
- 竹沢泰子. 2005. 「人種概念の包括的理解に向けて」竹沢泰子（編）『人種概念の普遍性を問う——西洋的パラダイムを越えて』pp. 9–109. 人文書院.
- Biasutti, Renato. 1905. “Pastori, agricoltori e cacciatori nell’Africa orientale interna, annesso giorno dell’Etiopia.” *Bolletino della Società Geografica Italiana*, 42, 155–179.
- Biasutti, Renato. 1937. “La posizione antropologica degli Etiopici: Osservazioni critiche.” *Archivio per l’antropologia e la etnologia*, 47, 41–60.
- Biasutti, Renato (ed.). 1941. *Le razze e i popoli della terra*. 3 vols. Torino, Unione tipografico-editrice torinese.
- Biasutti, Renato (ed.). 1953–1957. *Le razze e i popoli della terra*. 4 vols. Torino, Unione tipografico-editrice torinese.
- Biasutti, Renato (ed.). 1959. *Le razze e i popoli della terra*. 4 vols. Torino, Unione tipografico-editrice torinese.
- Biasutti, Renato (ed.). 1967. *Le razze e i popoli della terra*. 4 vols. Torino, Unione tipografico-editrice torinese.
- Cassata, Francesco. 2024. *Racism and Antisemitism in Fascist Italy: The Politics, Ideology and Imagery of ‘La difesa della razza.’* Tr. by Stuart Oglethorpe. London, Routledge.
- Cerulli, Ernesta. 1968. “Biasutti, Renato.” Alberto M. Ghisalberti (ed.), *Dizionario biografico degli Italiani*. Roma, Istituto della Enciclopedia Italiana, 10, 296–298.

- Cipriani, Lidio. 1923. “Crani del territorio abissino.” *Archivio per l’antropologia e la etnologia*, 53 (1–4), 11–24.
- Cipriani, Lidio. 1932. *Considerazioni sopra il passato e l’avvenire delle popolazioni africane*. Florence, R. Bemporad.
- Cipriani, Lidio. 1935. “Il passato e l’avvenire degli etiopici secondo antropologia.” *Gerarchia*, 11, 916–919.
- Cipriani, Lidio. 1936. *Un assurdo etnico: L’impero etiopico*. Firenze, Bemporad.
- Cipriani, Lidio. 1938. “Gli etiopici secondo il razzismo.” *La difesa della razza*, 5, 34–36.
- Conti Rossini, Carlo. 1913. “Schizzo etnico e storico delle popolazioni eritree.” Società di Studi Geografici (ed.), *L’Eritrea economica*. Novara-Romam, Istituto Geografico de Agostini, 61–90.
- Filaldi, Giuseppe. 2017. *A History of Italian Colonialism, 1860–1907: Europe’s Last Empire*. London & New York, Routledge.
- Gillette, Aaron. 2002a. *Racial Theories in Fascist Italy*. London, Routledge.
- Gillette, Aaron. 2002b. “Guido Landra and the Office of Racial Studies in Fascist Italy.” *Holocaust and Genocide Studies*, 16 (3), 357–375.
- Giuffrida-Ruggeri, Vincenzo. 1915. “Nuovi studi sull’antropologia dell’Africa orientale.” *Archivio per l’antropologia e l’etnologia*, 45: 123–179.
- Haeckel, Ernst. 1868. *Natürliche Schöpfungsgeschichte*. Berlin, G. Reimer.
- Mochi, Aldobrandino. 1900 “Gli oggetti etnografici delle popolazioni etiopiche posseduti dal Museo nazionale di antropologia in Firenze.” *Archivio per l’antropologia e l’etnologia*, 30, 87–173.
- Montanari, Ellisa. 2018. “Sergi, Giuseppe.” Alberto M. Ghisalberti (ed.), *Dizionario biografico degli Italiani*. Roma, Istituto della Enciclopedia Italiana, 92, 108–111.
- Pankhurst, Richard. 1969. “Fascist Racial Policies in Ethiopia, 1922–1941.” *Ethiopia Observer*, 12, 270–286.
- Ricci, Lanfranco. 1983. “Conti Rossini, Carlo.” Alberto M. Ghisalberti (ed.), *Dizionario biografico degli Italiani*. Roma, Istituto della Enciclopedia Italiana, 28, 527–529.
- Rigo, Gaetana Silvia. 2011. “Mochi, Aldobrandino.” Alberto M. Ghisalberti (ed.), *Dizionario biografico degli Italiani*. Roma, Istituto della Enciclopedia Italiana, 75, 170–173.

- Seligman, Charles Gabriel. 1930. *Races of Africa*. London, Thornton Butterworth.
- Sergi, Giuseppe. 1895. *Origine e diffusione della stirpe mediterranea*. Roma, D. Alighieri.
- Sergi, Giuseppe. 1901. *The Mediterranean Race: A Study of the Origin of European Peoples*. London, Walter Scott.
- Sòrgoni, Barbara. 2002. “Racist Discourses and Practices in the Italian Empire under Fascism.” Ralph Grillo & Jeff Pratt (eds.), *The Politics of Recognizing Difference: Multiculturalism Italian-Style*. Aldershot, Ashgate, 41–57.
- Sòrgoni, Barbara. 2003. “Italian Anthropology and the Africans: The Early Colonial Period.” Patrizia Palumbo (ed.), *Place in the Sun: Africa in Italian Colonial Culture from Post-Unification to the Present*. Berkeley, Los Angeles, & London, University of California Press, 62–80.
- Stratz, Carl Heinrich. 1904. *Naturgeschichte des Menschen: Grundriss der Somatischen Anthropologie*. Stuttgart, Verlag von Ferdinand Enke.
- Surdich, Francesco. 1981. “Cipriani, Lidio.” Alberto M. Ghisalberti (ed.), *Dizionario biografico degli Italiani*. Roma, Istituto della Enciclopedia Italiana, 25, 760–762.
- Vandewalle, Dirk. 2006. *A History of Modern Libya*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Von Luschan, Felix. 1912. “Hamitische Typen.” Carl Meinhof (ed.), *Die Sprachen der Hamiten*. Hamburg, L. Friedreichsen, 241–256.
- Zeroli, Stefania Lucia. 2001. “Giuffrida-Ruggeri, Vincenzo.” Alberto M. Ghisalberti (ed.), *Dizionario bibliografico degli Italiani*. Roma, Istituto della Enciclopedia Italiana, 56, 682–685.